

中国のたまねぎ生産と産地構造(3)

北海道大学大学院 農学研究院 准教授 朴 紅
 北海道大学大学院 農学研究院 教授 坂下 明彦

⑤ 長日照地域のたまねぎ生産 — 黒龍江省

長日照地域は、北京より北側の地域が該当し、具体的には北京、天津、河北省の一部、甘肅省、東北三省、内モンゴルに分かれる。地域全体のたまねぎの作付面積は七〇〇—一〇〇万ムー（四・七〜七・三万ha）である。気象の特徴としては、甘肅省や内モンゴルの夏は高温、乾燥であるが、対照的に東北部は湿潤である。この地域は秋たまねぎの産地であり、生産期間は播種期が二月下旬〜三月上旬、定植期が四月下旬〜五月下旬の二〇日間、収穫は八月下旬〜九月中旬である。当地域では育苗はハウスで行われ、保存は寒冷のため屋内で行われており、長期保存が可能である。翌年の三月まで、つまり春たまねぎの回り前まで出荷が行われる。

内モンゴル、吉林省は中国の中でもたまねぎ生産の歴史が古く、特に内モンゴルは肉食文化であり、かつ野菜はたまねぎのみであるため、たまねぎと食文化の歴史は密接に關係している。この地域の

代表的な産地は吉林省、内モンゴル自治区と黒龍江省であるが、以下では、まず各産地の概略の紹介を行い、その後、聞き取り調査（二〇一三年十一月二四日、ハルビンたまねぎ研究所）に基づき、黒龍江省の産地についてやや詳しく述べてみたい。

1) 吉林省

主な産地は延吉市である。延吉市は吉林省の東部に位置し、図門と隣接し、延辺朝鮮族自治州の州庁所在地である。吉林省の中でもたまねぎ産地として重要な位置にあり、一九九〇年代の半ばにたまねぎが導入されてから十数年が経過する。近年では、たまねぎの作付面積は一〇、〇〇〇ムー（六六七ha）の水準を維持している。この地域では二月中下旬から育苗し、下旬に定植を行う。一ムー当たりの株数は二二、〇〇〇〜二二、〇〇〇株である。たまねぎの特徴は、玉が小さく、質が良いことと貯蔵性に優れている点にある。製品の多くは主に边境貿易の形でロシアに輸出し、一部は韓国、日本と東南アジアにも輸出されている。

2) 内モンゴル

主な産地は、ウランチャブ、商都、赤峰、通遼に集中している。二月末から三月初旬にかけて育苗を行い、四月末から五月初旬に定植する。一ムー当たりの定植数は二二、〇〇〇〜二五、〇〇〇株であり、八月下旬から九月初旬に収穫する。たまねぎの栽培面積の推

移をみると、二〇〇五年に六、六六七ha、二〇〇六年には八、〇〇〇haを示し、収量は三四・九万トンとなった(二〇〇六年)。しかし、二〇〇六年の豊作により市場価格が低下し、二〇〇七年、二〇〇八年には栽培面積が減少した。その後、二〇〇九には回復して八、六六七haに達し、販売額は三・二五億元となっている。販売は国内市場がメインであるが、輸出先についてはロシアと外モンゴルが主である。たまねぎの種類は黄たまねぎが最も多く、次いで紫たまねぎとなる。白たまねぎは主に加工用に栽培されている。黄たまねぎと白たまねぎは主に輸入品種であり、紫たまねぎは在来種である。

3) 黒龍江省

東北部のたまねぎ面積は六万ムー(四、〇〇〇ha)であるが、そのうち、黒龍江省が四万ムー(二、六六七ha)、六七%を占めている(二〇一三年)。黒龍江省のたまねぎ栽培は一九五〇年代から開始され、現在まで六〇数年の歴史を有している。当初は山東省からの移民が日照の品種を持ち込み、庭先栽培を行ってきたが、計画経済下では域内流通に限定されていた。品種は主に中日照地域の「山東紫皮」であり、定植後四〜六葉期に鱗茎が肥大するが、七月中旬から八月上旬の間は高温のため倒伏し休眠状態となる。その後、一〇月末に蘇生するが、発芽を起すため、商品価値を失ってしまう。そのため、黒龍江省農業科学院などのたまねぎ研究部門では、長期に渡る試験を行い、「山東紫皮」種を元に比較的湿度に強く、

高温でも成長を抑制できる球形大玉の品種(Gano (GAR))を開発した。一方、一九八五年頃から黒河地域では貯蔵性に優れた「熊岳」という品種が普及したが、長日照と高温に敏感に反応するため、持続的に栽培することができなかった。一九九〇年には山西省大同地域からアメリカNolan系統のGobe種という長日照紫皮種を導入した。

その後、一九九三年からは北海道の品種である「空知黄」を導入し、チチハルのメリス地区で栽培を始め、徐々に産地が形成された。この品種はロシアに輸出するほかに、瀋陽などの東北地域の市場で「熊岳」を代替するようになっていく。それまで東北地域で最大のたまねぎ主産地は遼寧省北鎮であったが、この時期にチチハル市に産地が移動した。二〇〇四年にはチチハル市のたまねぎ栽培面積は一六万ムー(一〇、六六七ha)に達し、東北部のたまねぎの市場価格を左右するまでの大産地に成長した。しかし、当時、たまねぎの貯蔵技術が未確立であり、生産はまた不安定な段階にあった。例えば、農墾の紅興隆管理局管轄の国有農場で一時的に大規模な栽培を行ったが、たまねぎの防腐技術などが遅れていたため、継続して栽培することを断念せざるを得なかった。

品種に関しては、この時期に北海道の品種(札幌黄)、「月光」、「月輪」、「天心」、「檜熊」、「カムイ」、「野狼」、「北紅葉」などのGobe系の黄皮品種とG.C.等の紫皮品種を大量に導入すると同時に、在来種との交雑試験を繰り返し、その結果、新しい品種が生み出さ

れ、それまで栽培されてきたのgo系は一掃された。また、ハウスの育苗技術、圃場のリン酸・カリの施肥技術、除草剤の技術などが普及されていくのである。このような品種改良と育苗・栽培技術の革新によって、二〇〇四年からは農墾九三管理局の鶴山農場が、黒龍江省における最大規模のたまねぎF1種の輸出基地となった。製品の中で、最上級のA級品は日本へ、M規格はロシアのプリアート共和国および極東地域へ、S規格は東南アジア市場へ輸出するようになった。同時期に、黒龍江省の東部では、牡丹江寧安紅城グループの富竜たまねぎ会社がロシア向けのたまねぎ輸出基地となった。

黒龍江省の野菜輸出量において、たまねぎは一貫して一位を維持しており、年間輸出量は二〇万トン程度であり、これは中国対ロシア向けの八〇％（フレッシュ）に相当し、中国全体のフレッシュたまねぎ輸出量の六〇％を占めている。製品の多くは、B級品であるが、日本市場に入っているA級品は二〜五万トン程度である。

以下では、黒龍江省の主要なたまねぎ産地であるチチハル市を紹介する。チチハル市は中国の東北部にある松嫩平原に位置している。東は大慶市、綏化地区と隣接し、南は吉林省白城地区、西は内モンゴルのホロンバイル、北は黒河、大興安嶺と隣接している。土地面積は四二五万ha、海拔は二〇〇〜五〇〇メートルであり、平原面積が三五五万ha、全体の八三・七％を占めている。チチハル市におけるたまねぎの主要産地はメリス区である。メリス区は中国唯一の夕

ウル族の集住地域であり、チチハル市の緑色食品の生産地でもある。耕地面積は九七、三八二haであり、中温帯の半湿潤大陸性気候に属している。たまねぎの栽培面積は二〇〇一年時点では一、五〇〇haに過ぎなかったが、二〇〇四年には八、〇〇〇haに達し、その後、市場価格の低迷などの影響を受け、二〇一一年には五、三三六haまで減少し、近年ではこの水準を維持している。一〇a当たりの単収は品種改良、栽培技術の向上によって高まっており、二〇〇一年には五・七トン、二〇〇四年には三・九トンであったが、二〇一一年には七・五トンに達している。

たまねぎ農家の作付規模は一戸当たり一五〜三〇ムー（一〜二ha）であり、品種は日本のタキイ種苗の種子、アメリカ産の種子、自家採取の三種類である。中でもタキイ種苗の種子が最も農家に好まれているが、入手困難のため全体の二〇％に過ぎない。育苗は二月初旬〜三月一五日、定植は四月一五日〜五月一日、収穫は定植してから九〇〜一二〇日間である八月の中、下旬である。二〇一二年の単収は七トンであったが、二〇一三年には七月の低温と多雨の影響を受け、単収は五トンに留まった。出荷価格については、二〇一二年は一・七〇元/kgであったが、二〇一三年には悪天候のため、品質も例年より低下しており、〇・七〇〜〇・九〇元/kgに下落している。たまねぎの生産コストは一ha当たり六・五万元であるが、そのうち、借地料が一八、〇〇〇元（二七・七％）、雇用賃金が九、〇〇〇元（一三・八％）、農業代が五、〇〇〇元（七・六％）、種子

代が三、三〇〇元（五・一％）、その他となっているが、このうち、借地料と雇用賃金が全体の四割以上を占めている。これは、他の野菜地帯とも共通する傾向である。

メリス区が大規模なたまねぎ産地に成長した背景には、区農業技術普及システムの確立と農民專業合作社の存在があった。区技術センターには専門技術員が一七人おり、六つの郷鎮には一般技術員が一六人、四九の行政村には指導農家が二五八人在籍しており、技術指導を個別農家レベルまで行うシステムが形成されている。二〇一二年には一四項目の新技術が普及され、普及率は九〇％に達している。また、達郷の合作社は組合員のたまねぎの品質の高位平準化を強力に進めると同時に、沿海地域を含む遠隔地の市場を積極的に開拓し、品質の上位のA級品は山東省の食品加工公司に出荷し、その他の中級品は国内の卸売市場と大型量販店に出荷する体制を整えている。

⑥ おわりに

以上みてきたように、中国のたまねぎの生産量は一、五〇〇万トン、そのうち輸出货量は五〇万トンであり、その割合は小さいが、これは日本の生産量の二分の一、隣の韓国の生産量の三分の一に相当する。日本のたまねぎ輸入量は年間二五万トンであり、生産量の四分の一に達しているが、輸入先はかつてのアメリカ・ニュージールランドから中国にシフトしており、その依存度は非常に大きい。これ

もまた、開発輸入的性格を有している点に特徴がある。日本向けの輸出港は山東省の青島と江蘇省の連雲港であるが、これらは後背地に産地を持つとともに、貯蔵施設を有し、広域的な集荷を行っていることに特徴がある（図）。

今後は、こうした拠点港への集荷構造の実態やむき玉の加工過程、日本国内での消費構造などに注目し研究を進めてみたい。

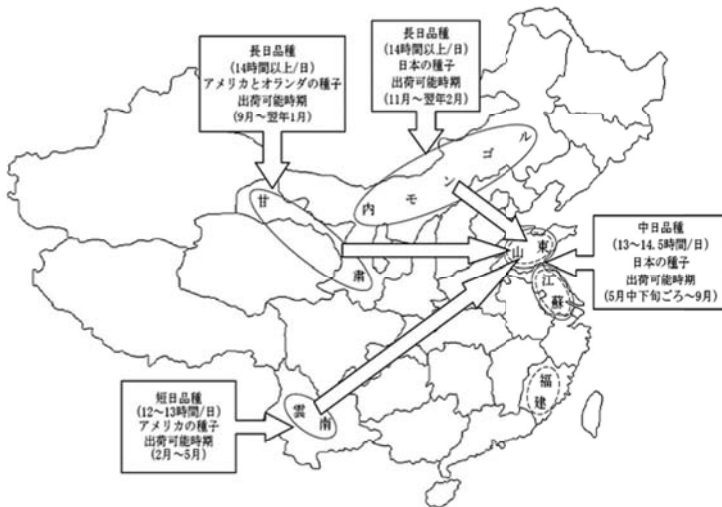


図 中国産たまねぎの日本向け主要輸出産地

注) 周 曉東「中国産生鮮タマネギの日本向け輸出増大とその要因に関する実証的研究」p.58を引用。